



## 令和 7 年度 事業報告

### 1. 概要

令和 7 年度は、イラン情勢の悪化により更なる物価高騰、最低賃金の改正により引き上げ率、引き上げ額、共に過去最高となった。そして、止まらぬ少子高齢化、人口減少というこれまで以上に厳しい経営環境に置かれた一年であった。

介護保険制度改正により、施設入所基準が重度化へとシフトされた。その関係で、医療的ニーズの高い利用者の入所、100 歳前後の高齢者の入所も多くなった。その為、利用期間の短期化、医療機関への入院が顕著である。また、大田市の人口減少に伴い、要介護度高齢者数、特養への入所申請も減少している。施設においては入院、退所等のリスクに対して医療、関係機関と迅速に対応し、安定した運営に努めた。

児童福祉においても、顕著な少子化の影響を受けた。市内、他保育所において定員減の保育園もある中、当法人では、地元は元より他圏域からの受け入れを柔軟に行うことにより、経営の安定化を図った。

毎年のように全国各地で災害が発生しているなか、義務化となったBCP（業務継続計画）においては、火災・水災等、災害訓練に加え、感染症については、減少傾向にあるものの、変わらず予断を許さない状況が続いている。常に感染状況の周知と確認を徹底するとともに、感染症発症時の訓練を行った。

また継続し、介護、保育現場の生産性の向上、効率化、業務負担の緩和を継続して行った。ICTの取り組みとして、補助金を活用しながらインカム、眠りスキャン、その他介護ロボットの導入、保育園においては、保育業務関連のシステムを導入し、業務の一元化、省力化を図った。

前年に続き、全国的に慢性的な人材不足に対し、県内の短大、専門学校への事前訪問等を積極的に行った。加えて、就職フェアへの参加、介護、保育実習を積極的に受け入れ、新卒者の採用につなげた。また、既存の非正規職員に対しては、登用制度を用いて正規職員への登用を行った。広報活動として、各事業所とも、ホームページの更新を定期的に行い日々のエピソードやイベント等の発信（イメージアップ）に努めるとともに、各関係機関の求人サイトへの登録、更新にて、情報発信と人材確保に努めた。

業務のマンネリ化を防ぎサービスの質の向上を目指し、職員の離職防止の為、人事交流を目指したが、十分な交流、異動ができなかった。今後も継続して専門家に相談しながら、諸規定等の改正を行い、公平な人事制度の確立を目指す。

財務面においては、毎月のように発表される値上げに影響を受けた。業務、仕入れ業者等の見直しを行い効率化、節減、節約を職員に呼びかけ、運営会議にて月毎の実績を報告し、情報の共有に努めた。

令和7年度も、職員研修の重要性を念頭に置き、各研修会参加をはじめ、「聞く研修から、発表する研修」へと方向性を変え、広島市で開催された中国地区老施協研究大会にてサンシルバーさわらびの地域貢献の取組事例を発表した。

#### 事業所別 利用状況

事業所名	令和7年度目標	令和7年度実績	令和6年度実績
サンシルバー（契約）	98%	98.5%	97.3%
サンシルバー（短期）	1名/日（空床利用）	2名/日（空床利用）	1.2名/日（空床利用）
グループホーム	99%	99.4%	97.3%
居宅さわらび	介護 95名/月 予防 11名/月	介護 94.3名/月 予防 9.4名/月	介護 97.7名/月 予防 8名/月
ゆうイング（契約）	99%	99.7%	98.5%
ゆうイング（短期）	63%	62.6%	58.4%
デイサービスゆうイング	17名/日	13.5名/日	14.9名/日
サンチャイルド長久さわらび園	125名/月	123名/月	128名/月
ゆうゆう学童クラブ	平均児童数 37名	平均児童数 32名	平均児童数 49名

## 2. 理事会開催状況

### (1) 第246回役員会

日時 令和7年6月3日（火）

場所 ゆうイングさわらび

報告 理事長職務執行状況報告

社会福祉充実残額について

議題 第1号議案 令和6年度事業報告の承認について

第2号議案 令和6年度一般会計決算の承認について（監査報告）

第3号議案 社会福祉法人放泉会職員給与規程の一部改正について

第4号議案 社会福祉法人放泉会役員等の報酬規程の一部改正について

第5号議案 社会福祉法人放泉会職員就業規則・有期契約職員就業規則の

一部改正について

第6号議案 社会福祉法人放泉会理事・監事候補者の選任について

第7号議案 社会福祉法人放泉会評議員候補者の推薦について

第8号議案 定時評議員会の開催について

(2) 第247回役員会

日時 令和7年6月18日(水)

場所 ゆうイングさわらび

報告 理事長職務執行状況報告

議題 第1号議案 理事長・業務執行理事の選定について

第2号議案 社会福祉法人放泉会役員等退職金規程の廃止について

第3号議案 社会福祉法人放泉会役員等の報酬規程の一部改正について

(3) 第248回役員会

日時 令和7年10月21日(火)

場所 ゆうイングさわらび

報告 理事長職務執行状況報告

令和7年度事業活動収支差額分析

上半期の振り返り

土地の寄付について

中国地区老人福祉施設研修大会について

議題 第1号議案 令和7年度一般会計資金収支補正予算の承認について

第2号議案 社会福祉法人放泉会職員就業規則・有期契約職員就業規則の一部改正について

(4) 第249回役員会

日時 令和7年12月23日(火)

場所 ゆうイングさわらび

報告 理事長職務執行状況報告

令和7年度事業活動収支差額分析

サンチャイルド実地監査報告

監事監査(定期監査)報告について

内部経理監査報告

法人指導監査報告

議題 第1号議案 社会福祉法人放泉会経理規程の一部改正について

第2号議案 社会福祉法人放泉会運営規程の一部改正について

第3号議案 臨時評議員会の開催について

(5) 第250回役員会

日時 令和8年3月24日(火)

場所 ゆうイングさわらび

報告 理事長職務執行状況報告

令和7年度事業活動収支差額分析

議題 第1号議案 令和7年度一般会計資金収支補正予算の承認について

- 第2号議案 令和8年度事業計画の承認について
- 第3号議案 令和8年度一般会計資金収支予算の承認について
- 第4号議案 社会福祉法人放泉会修学資金貸与規程の一部改正について
- 第5号議案 社会福祉法人放泉会経理規程の一部改正について

## 2. 評議員会開催状況

### (1) 第87回評議員会

日時 令和7年6月18日(水)

場所 ゆうイングさわらび

報告 なし

議題 第1号議案 令和6年度事業報告の承認について

第2号議案 令和6年度一般会計決算の承認について(監査報告)

第3号議案 社会福祉法人放泉会理事・監事の選任について

第4号議案 社会福祉法人放泉会役員等の報酬規程の一部改正について

### (2) 第88回評議員会

日時 令和8年3月24日(火)

場所 ゆうイングさわらび

報告 令和8年度事業計画(案)について

令和8年度一般会計資金収支予算(案)について

議題 第1号議案 社会福祉法人放泉会役員等の報酬規程の一部改正について

## 3. 監査等の状況

### (1) 放泉会監事監査

①令和7年5月27日(火)、5月28日(水) 9:00~16:00

定款第20条及び監事監査実施規程に基づく監査

前田正雄、田中昭一両監事

立会人 瓜坂理事長、中間内部経理監査担当理事、各施設長、各部課長、各担当者

②令和7年11月12日(水)、11月13日(木) 9:00~16:00

定款第20条及び監事監査実施規程に基づく監査

11月12日(水) 9:00~16:00 さわらび拠点及びサンチャイルド拠点

11月13日(木) 9:00~15:00 ゆうイング拠点

田中昭一、林泰州両監事

立会人 瓜坂理事長、中間内部経理監査担当理事、各施設長、各部課長、各担当者

### (2) 内部経理監査

内部経理監査規程第5条1項1号に基づく定期監査

令和7年11月12日(水)、11月13日(木)

11月12日(水) 9:00~16:00 さわらび拠点、サンチャイルド拠点、学童拠点

11月13日(木) 9:00~16:00 ゆうイング拠点

中間内部経理監査担当理事、小谷泰之、加藤幹子

#### 4. 役員等の研修状況

- (1) 令和7年7月1日(火)  
社会福祉法人指導監査説明会・研修会 大田市 瓜坂理事長、中間理事、小川理事  
田中監事、林監事
- (2) 令和7年7月10日(木)、11日(金)  
中国・四国地区社会福祉法人経営者セミナー 岡山市 瓜坂理事長、向田理事
- (3) 令和7年10月16日(水)、17日(木)  
中国地区老人福祉施設長研修会 広島市 瓜坂理事長、向田理事
- (4) 令和7年12月4日(木)、5日(金)  
全国老人福祉施設大会・研究会議 山口市 瓜坂理事長、小川理事
- (5) 令和7年12月15日(月)～令和8年1月30日(金)  
社会福祉法人監事研修(5H) eランニング 林監事
- (6) 令和8年3月24日(火)  
人権研修「ウェルカム! -外国人の人権-」 ゆうイングさわらび  
瓜坂理事長、龍岩理事、中間理事、中島理事  
向田理事、小川理事、田中監事、林監事

#### 5. 苦情相談

事業所名	内 容	対 応
サンシルバー	なし	なし
グループホーム	なし	なし
ゆうイング	なし	なし
DS ゆうイング	なし	なし
居宅さわらび	なし	なし
サンチャイルド長久さわらび園	なし	なし
ゆうゆう学童クラブ	なし	なし

## 〈サンシルバーさわらび(空床利用型短期入所生活介護事業所)〉

### 〈サンシルバーさわらび方針〉

- 目 標 1 「居心地の良い生活環境の支援」  
報 告 1 ・広島で行われた老施協研究大会に参加、社会福祉法人として地域との関わりと今後についての発表を行った。ユニットの特色である個別対応を目指し、研修会等に積極的に参加した。人材確保に向け、積極的に初任者研修への講師派遣、介護実習生の受け入れを行い採用につなげた。
- 目 標 2 「家族との繋がりを維持した生活支援」  
報 告 2 ・家族との積極的な情報共有を電話やホームページを通して行った。利用者確保、人材確保の一環として、広報活動に力を入れ、高い頻度でホームページのアップを行い情報発信を行った。終息が見えない感染症であるが、嘱託医と相談、ご利用者、ご家族のニーズに対応し日曜日の面会を開始し、365日面会が可能となった。
- 目 標 3 「法人内の各施設との交流を図る」  
報 告 3 ・毎月の運営会議に参加して情報の共有を図った。

### 〈相談員部門〉

- 目 標 1 「生産性の向上」  
報 告 1 ・眠りSCAN、連動型体温計、血圧計の導入、活用により業務時間の効率化が図れた。眠りSCANについては、研修会等によりさらに効果的な活用を目指す。
- 目 標 2 「関係機関、家族との密な連携」  
報 告 2 ・入退所、入退院時、迅速な情報共有により出来るだけ空床とならないように努めた。結果として退所後の入所までに要する期間は平均して1週間程度であった。ホームページを活用し、情報発信に努めた。日曜日の面会を開始し、365日面会が可能な体制となった。
- 目 標 3 「稼働率目標値の達成」  
報 告 3 ・空床が生じた際には短期入所の調整を行った。馴染みの利用者が増えたことで以前に比べて短い期間での調整が可能となった。結果として年間の稼働率は98.5%であった。

### 〈介護支援専門員部門〉

- 目 標 1 「状態に合わせたサービス提供を行い、入居者、家族が安心感をもてる支援を行う」  
報 告 1 ・外出支援は、上半期(4~9月)17件、下半期(10~3月)7件、定期的な外出も実施した。内容はお花見ドライブ(桜・銀杏)、自宅外出、散髪、お悔やみ訪問、他家族の面会、携帯電話の手続きであり、入

居者家族のニーズに応じた支援を行うことができた。

- ・看取り期においては、24時間シートに基づいた対応と継続的な家族への情報提供を行い、本人・家族の意向に寄り添った支援を実施した。
- ・個別ニーズに基づき、ケア目標・支援内容を設定し、多職種間で共有した。モニタリング、担当者会議にて効果検証を行い、評価に応じてサービス内容の見直しを実施し、PDCAサイクルに基づく継続的な改善に努めた。
- ・担当者会議は年間117件実施し、そのうち家族参加は87件（約74%）だった。家族参加率は高水準であり、情報共有や意思決定支援の強化につながった。
- ・担当者会議、ミーティング、フロア会、委員会を通じて入居者の状態把握と情報共有を行い、ケアの統一を図った。また、日常的に面会や電話にて家族との情報共有を継続した。
- ・短期入所利用者については、居宅介護支援事業所と連携し、在宅生活の継続を見据えた支援を行った。

目 標 2 「新 LIFE フィードバック表を活用し、ケアの質の向上を図る。」

報 告 2

- ・フィードバック表を活用し、家族に現状の説明をし、ケアプランや介助方法等の見直しに活かすことができた。
- ・上半期（9月29日）、下半期（3月27日）に LIFE フィードバック表を用いた分析会を実施し、多職種で施設全体の傾向を共有した。
- ・分析の結果、評価のばらつきや判断基準の不統一が課題として挙げられた。また、入居者の高齢化・重度化に伴い、医療ニーズが高まっており、特に栄養管理の早期対応の重要性が確認された。口腔ケアの徹底による誤嚥性肺炎予防や体調変化の早期発見の必要性についても再認識した。
- ・ADL や口腔ケアなどの重複項目において評価のズレがみられたため、今後は外部研修や施設内勉強会を通じて判断基準の統一を図る。
- ・令和7年8月25日施設マネジメント研修に参加。  
適切なケアマネジメント手法について学び、自身の視点の偏りや不足を認識し、基本に立ち返る重要性を認識した。
- ・令和7年度は、介護支援専門員更新研修過程Ⅱに参加。他事業所との意見交換において、AIを活用した会議録作成の手法を知り、現在は担当者会議や委員会を中心に活用している。これにより記録作成に要する時間の短縮につながり、入居者とのコミュニケーションやモニタリングにあてる時間を確保することができ、業務の効率化および支援の質の向上につながった。

## <サンナース部門>

目 標 1 「入居者の健康管理に努め、疾病の悪化・入院を最小限にする」

- 報告 1 ・日々のバイタルサイン測定や全身状態の観察を継続することで、入居者変化に気づき早期に嘱託医へ連絡し指示を受けながら入居者の健康管理に努めた。指示に基づいた採血や点滴、酸素投与などを行い、施設内で可能な治療により疾病からの早期回復へ繋げた。ただ、施設内での治療には限界があり、嘱託医の判断で入院治療が必要となった際は看護添書を作成しスムーズに入院へ移行できるよう配慮した。  
1年間の入院者数は28名。
- 目標 2 「入居者、家族が安心して最期を迎えられる看取りケアを目指す」  
報告 2 ・家族と、入所時や面会時に積極的にコミュニケーションを図り、看取りに関しての意向や希望を確認した。また、全人状態に変化がみられたり治療が必要になった際は、嘱託医の指示を受けながら経過説明を行い家族の意向を踏まえた関りができるよう取り組んだ。看取りは嘱託医判断で開始となるため、苑で亡くなられた方によっては、家族と過ごせる時間も少なく、入居者や家族が希望されている形での最期のお見送りができないこともあった。  
1年間の看取り対象者 5名  
1年間の死亡退所者 24名（内、苑での死亡退苑者 14名）
- 目標 3 「医療職としての知識・技術の向上を目指す」  
報告 3 ・オンラインでの研修参加はあったが、外部研修への参加ができず、新しい看護技術や知識の習得ができていないため、入居者に対して提供する最良のサービスができていない。
- 目標 4 「感染症の発症予防と蔓延防止に努める」  
報告 4 ・感染予防の重要性を感染症委員会と共同で発信し、法人全体で感染症予防に努めた。1年間での感染症発症は、10月にショート利用者1名入居者4名のコロナ感染、12月に職員1名と入居者2名の百日咳があった。また、12月に入ってから各フロアで風邪が蔓延したが、点滴や酸素投与など、嘱託医の指示により対応し、入院に至ることはなかった。
- 目標 5 「業務改善を図る」  
報告 5 ・ゆうイングからの異動、また、苑内フロア間の異動を行うことで業務内での「気づき」があり、その気づきを基に業務改善につなげることができた。1日の業務内容を把握し、優先順位を考え無駄な業務を省いたこと、今まで手書きで行っていたことをパソコンで処理し、作業時間の短縮を図ったことで残業の多かった回診日も業務時間内で終了することができるようになった。看護師全員が4フロアの情報が見られるよう、毎日ナースミーティングや月に一回の看護課会などで情報共有を図り取り組んだが個人差もあり課題が残った。

## <機能訓練部門>

- 目標 1 「利用者一人一人の目標・目的に沿った個別性ある訓練を実施し、

- 機能維持・向上に繋げる」
- 報 告 1
- ・3か月ごと、入退院・看取り等での状態変化に身体機能評価を行い、入居者一人一人の状態を把握することで個別性ある個別機能訓練計画の立案・実施ができた。
  - ・ベッド上でのポジショニング技術向上のために、施設内勉強会を計2度開催(外部講師協力による勉強会含む)し、職員の知識・技術面の向上を図ることができた。
  - ・入居者一人一人の身体機能状況を把握し、入居者の残存機能を活かす車椅子・歩行器・福祉用具の選定ができた。
  - ・外出希望のある入居者家族より、自家用車への移乗方法についての相談に応え、入居者・家族ともに満足のいく外出支援に繋げることができた。
- 目 標 2 「新LIFE フィードバック表を活用し、ケアの質の向上を図る」
- 報 告 2
- ・LIFE フィードバック表から、入居者一人一人の身体機能状況を把握し、訓練計画の立案に活かすことができた。
  - ・担当者会議の場でLIFE フィードバック表を活用し。現在の身体機能を以前と比較した状態についてグラフ・数値等の科学的根拠を用いて家族へ分かりやすく説明することができた。
  - ・施設内での多職種参加のLIFE分析会に参加し、施設全体から見た入居者の状況について共有することができた。

### <ヘルパー部門>

- 目 標 1 「個々の入居者の生活に合わせたユニットでの個別ケアの実践」
- 報 告 1
- ・介護支援専門員と共同で24時間シートと日課計画表の見直し・作成を行い、各フロアで差はあるものの、個別ケアを実践し身体機能の維持・向上、認知症・精神疾患の周辺症状(徘徊、転倒等につながる行動など)への対応ができた。
  - ・体調変化時には、面会時や電話連絡を行い、家族との情報共有が図れ入居者・家族への要望に沿ったケアにつながった。
  - ・科学的ケアの取り組みとして、各フロアで毎日ミーティング、また月単位でフロア会を開催し、PDCAサイクルを用いて計画→実践→評価→改善を行い、健康管理、リスク回避などができた。
- 目 標 2 「【ムリ】【ムラ】【ムダ】をなくし効率化・能率化を図る」
- 報 告 2
- ・働き方シートを作成し、介護職員全員の制限(疾病による業務制限子育て・介護に日数・時間制限など)を出しあい、各自が把握することで、フォローする側、される側の職員がお互いに支えあって仕事をする体制にしたことで、過剰なフォローや職員の間関係などが改善され業務の効率化につながった。
  - ・眠りスキャン、タブレットなどのICT機器を増台し、業務の簡素化や職員の身体的・精神的負担の軽減につながり、そこで捻出した時間を

入居者へのケアや環境整備などに還元することができた。

- ・多職種協働の取り組みとして、フロア会に必要おじて多職種の参加を要請し、日々の業務の中でも話し合う場を増やしたことで、専門的分野による早期の問題解決が多くなった。

目 標 3 「スキルアップと働き方改革」

報 告 3

- ・月単位のフロア会とリーダー会の開催と各委員会での年2回以上の勉強会、老施協の県・中国・全国研修などの外部研修に参加し復命の時間を設けることでスキルアップ、働き方の取り組みにつながった。
- ・老施協中国大会の事例発表（地域貢献）を行い、聴いてもらう立場においての目標を達成した。
- ・初任者研修講師派遣、実習受け入れを行い、中途採用につながった。また、新卒採用への足掛かりとして、トリニティカレッジ専門学校1年生3名の実習受け入れを行った。
- ・老施協の次世代委員の所属施設として、北三瓶小学校で行われた、小中学生・多世代カフェを開催。「“地域医療”に学ぶ」の講演名で講師派遣をし、福祉・医療の仕事について小学生のうちから知ってもらえる場を持つことができた。
- ・年1回また介護職員全員の面談や、持病、子育て、介護などを抱えている職員の面談を希望時に実施し、他の職員の理解と協力を得て働きやすい日数・時間などの勤務形態の変更をサポートした。

<サンキッチン部門>

目 標 1 「入居者本人や家族の意向を尊重した栄養ケア計画書の作成」

報 告 1

- ・日頃から入居者の食事摂取状況の把握に努め、栄養ケア計画書作成の参考とした。また、必要時には多職種で食事形態・内容・量・自助具等の検討を行い、健康で安全な経口摂取が維持できるよう努めた。担当者会議で新 LIFE フィードバック表を用いて体重や栄養状態の移り変わりを家族に説明することができた。
- ・療養食加算については、令和7年4月1日時点での対象者は11名であったが、令和8年3月31日時点で9名となり、加算取得減となった。理由として、新たな対象者もあったが、入院・看取り対応・死亡退所・食事内容の変更による加算算定中止があげられる。

目 標 2 「食べる楽しみが継続できるような食事提供を行う」

報 告 2

- ・入居者の嗜好・要望には可能な限り対応し、入居者の体調変化に応じた食事提供に努めた。家族からの差し入れには個別対応し、差し入れの内容にも適宜相談に応じた。
- ・定期的にナリコマの担当者と協議し、検食結果や気づき、要望（入居者や他部門からの意見を含む）等を伝え、食事内容の改善につながるよう努めた。
- ・施設全体ではナリコマの献立を用いて季節の食事提供、開苑記念日や

長寿を祝う会でのお茶席の開催、彼岸のおはぎの提供を行い、ユニット単位でもすいか割りや夏祭り会、抹茶の点て出しを行い、入居者に喜んでいただけた。入居者から好評のおはぎの提供回数を増やすことができなかつたため、令和8年度では回数を増やす予定である。今後もユニット単位での行事等、間食などの希望があれば、キッチンも積極的に参加し、対応していく。

・少人数の入居者を対象に、非常食の提供訓練をおこなった。

目 標 3 「働き方を見直し、働きやすい職場づくりを目指す」

報 告 3

- ・職員の業務内容の見直しを行い、適材適所の配置を行った。今後も随時見直しを行い、職員間の業務量の偏りが少なくなるよう努めていく。
- ・4月と1月に新規職員の入職があり、早番・遅番ともに掛け持ち勤務なくすることができ、一部の職員にかかっていた負担を軽減することができた。
- ・面談を適宜行った上で、職員の家庭環境や体調を考慮したサポートや勤務表作成を行った。

目 標 4 「職員個々が衛生意識を高く持ち、感染症予防に努める」

報 告 4

- ・新規職員には、入職時に食中毒や感染症予防、衛生管理について勉強会を実施し、食中毒・感染症の動向については、随時注意喚起を行った。感染症・食中毒予防委員会と合同で、ノロウイルスを想定した食中毒対応訓練を行うことができた。
- ・職員の感染状況としては、風邪、新型コロナウイルス感染症、胃腸炎の発症があったが、入居者や他の職員への感染はなかった。

目 標 5 「BCPに沿って、緊急時に備える」

報 告 5

- ・防災委員会と共同でナリコマの担当者を講師として招き、緊急時の対応の勉強会やナリコマ非常食のデモンストレーション・試食会を開催した。キッチン職員だけでなく、施設全体で非常食・防災職への関心が高まった。

## 〈ゆうイングさわらび(併設型短期入所生活介護事業所)〉

### 〈ゆうイングさわらび方針〉

目 標 1 「法人本部としての機能の充実・強化」

報 告 1

- ・法人本部としての役割、特に人材確保については、年度初めの人事交流にとどまり、その後事業所を超えての調整には至らなかった。
- ・運営会議開催により、事業所間の情報共有を図ることはできたが、個別課題に対して対策等議論を深めるまでには至っていない。  
このため次年度においては、各部署との対話方式により、まずは課題等を共有・分析し、課題解決に向けて進めることとする。

目 標 2 「人材確保・定着の取組み」

- 報 告 2 ・勤務年数、職種を考慮しながら、老施協主催の研修を中心に参加を促し、職員の資質向上に向けた支援を図り、職員のモチベーション維持につなげた。
- ・介護職員初任者研修への講師派遣（13名）、トリニティカレッジ及び高校生（邇摩高、出雲西高）の実習受け入れを実施し、職員採用等につなげることが出来た。
- 目 標 3 「地域連携の推進」
- 報 告 3 ・感染予防等により生活教育の場としての機能は十分に発揮することは出来なかった。
- ・地域活動（敬老会・文化祭、清掃活動）への要請も増え、直接的な関わりを地域連携の核とするとともに、老人会へのマイクロバス貸出など活動支援も行った。

#### <相談員部門>

- 目 標 1 「利用者の楽しみを広げる」
- 報 告 1 ・感染症の懸念を乗り越え宅野神楽の訪問を受けることができた。コロナ以降、神楽鑑賞の機会がなかった入居者に喜んでいただく時間を持つことができた。
- ・サンチャイルドの園児の訪問が定着し、子どもたちとの触れ合いを楽しんでいただけた。
- ・桜・つつじ・大銀杏を鑑賞するドライブを実施した。
- 目 標 2 「速やかな短期入所の受入れ」
- 報 告 2 ・新規利用者また、前回利用から暫く利用がなかった利用者について居宅介護事業所の担当ケアマネと連絡を密に情報収集をしてスムーズに利用につなげるよう努めた。
- ・利用に向け事前調査、担当者会議のスケジュール調整を行い迅速な利用につなげるよう努めたが、様々な状況が重なっており、稼働率の維持が課題である。
- ・介護更新により、特養の入所要件を満たさなくなった利用者があったが、家族の強い要望もあり、ロングショートで対応をしている。
- 目 標 3 「生産性の向上」
- 報 告 3 ・眠りスキャン、インカムの活用が定着している。眠りスキャンのデータ分析を行い、積極的に活用し、ケアの向上に活かされている。

#### <介護支援専門員部門>

- 目 標 1 「個別性あるケアマネジメントを目指す」
- 報 告 1 ・下半期の担当者会議対象者は、看取り・新規利用者を含め48名で家族参加は32組だった。身元引受人が遠方在住であったり、都合が悪く欠席の場合は、電話にて意向を確認し、プランに反映できた。
- ・一度看取り対応となり、後に活力を取り戻され、看取り解除となられ

た利用者の対応も、家族・嘱託医・看護師・担当ヘルパーと連携を取り、迅速にプラン変更等に反映できた。

- ・担当者会議にて家族と共に決定したことは、担当ヘルパーからも発信し、連絡ノートやミーティング、担当者会議録にて職員に情報共有し、支援した。
- ・短期入所の新規利用者の担当者会議には必ず参加し、情報収集するとともに本人や家族の不安を軽減できるように細かく説明し、継続利用につなげるよう努めた。

- 目 標 2 「LIFE フィードバック表を活用し、ケアプランの立案、見直しに活かす」
- 報 告 2
- ・担当者会議にてフィードバック表を活用し家族にも現状の説明をしケアプラン・介助方法の見直しに活かすことができた。
  - ・ADL が緩やかに下降傾向であることが LIFE フィードバックにより確認できた。下降している理由については、全介助者が増えたことが考えられるが、ADL 改善に向け、多職種連携会議にて、訓練時だけではなく全体でできることがないか発信し模索中である。

#### <機能訓練部門>

- 目 標 1 「個々のニーズに沿った機能訓練、計画書作成を行う」
- 報 告 1
- ・多職種協働で情報交換し、利用者一人一人の状態把握を多角的に行い、ニーズに沿った個別機能訓練、計画書の作成を行なった。
- 目 標 2 「他職種と連携し、拘縮・褥瘡・怪我予防に努める」
- 報 告 2
- ・下半期は、車椅子からのずり落ち骨折診断 1 件、移乗時のずり落ち骨折診断が 1 件あった為、移乗方法・車椅子の選定方法について勉強会を行った。勉強会后、多職種との意見交換がより活発化し、利用者の身体状況に合わせた移乗方法、車椅子選定をすることができた。
- 目 標 3 「身体機能・認知機能の維持、活動意欲の向上を促す」
- 報 告 3
- ・小集団での体操の中でレクリエーション要素としてボール運動を行った。普段傾眠傾向の方や筋力訓練を好まれない方も意欲的に取り組んでいただくことができた。
- 目 標 4 「新 LIFE フィードバックの活用」
- 報 告 4
- ・LIFE フィードバックや日々の評価から身体状態を把握し、機能訓練を行った。LIFE フィードバック分析にて、年間を通して全体的に ADL が低下傾向であったため、個別機能訓練以外の時間においても活動量を増やせる取り組みを行っていく必要があると感じた。

#### <ゆうナース部門>

- 目 標 1 「入居者の健康管理に努め、入院による稼働率低下を最小限にする」
- 報 告 1
- ・令和 7 年度の入院者はのべ 15 名、死亡者は 10 名。  
6 年度の入院人数は 15 名、死亡者数は 13 名と、人数は、ほぼ変わらない結果となった。

入院先は、市立病院 8 件、呼吸循環クリニック 5 件、石東病院 2 件だった。

- 目 標 2 「入居者、家族ともに後悔なく『ここで最期を迎えられて良かったと思える看取りケアを目指す」
- 報 告 2
- ・介護職員が実施した看取り対応のアンケートに基づき、血圧、呼吸の変化や、死期が近づいた時の様子等、又看取り加算を取得する為の手続きの勉強会を実施した。
  - ・看取りの状態は個々により違いがあるが、入居者だけでなく、ご家族への関り方に変化がでてきているように感じる。
  - ・家族の協力で市街の自宅へ外出できた方がおられ、家族と共に喜びを感じることができた。
- 目 標 3 「介護職員が安心したケアが実践できるよう、専門的アシストをする」
- 報 告 3
- ・回診や受診時のドクター指示に対して、入居者の日常生活の中に取り込めるよう、介護課と相談、実施した。
  - ・外部研修への参加はできなかったが、内部研修を実施し、その為の資料・レジメ作り等を行った。
- 目 標 4 「施設内での感染症の拡大を未然に防ぐ」
- 報 告 4
- ・感染症委員会でBCPについての資料を作成したが、研修、訓練の実施はできなかったため、次年度はそれを元に見直しを行い、研修や訓練も実施したい。
- 令和 7 年 12 月 3 日に入居者 1 名コロナ発生、職員への感染はなかったが、入居者の感染は 5 名まで拡大し、感染解除までは 16 日間を要した。
- ・嘱託医と連携し、検査実施、内服開始、隔離対応等の確認、実施を速やかに行った。
  - ・委員会との連携の他、他部門とも情報共有しながら協力した。

#### <ゆうヘルパー部門>

- 目 標 1 「入居者一人ひとりと真摯に向き合う」
- 報 告 1
- ・個々の状態の把握と病歴、生活歴を知り、その方とコミュニケーションを通して得た情報の共有を行い、多職種と連携し、その方に合ったケアの実践を行った。
  - ・利用者の様子や状態について家族に電話で情報を伝え、安心感を持っていただけるようケアに努めた。
  - ・必要な利用者には眠りスキャンを使用し、睡眠状態の把握、排泄間隔覚醒状態の調査を行い、そのデータをケアに反映させることができた。
- 目 標 2 「入居者・家族が望まれる終末期になるよう環境を整える」
- 報 告 2
- ・6 名の看取り介護に関わることができた。家族には安心していつでも面会ができるように、ベランダから出入りできる個室への居室移動を行い急な面会にも対応できるように配慮した。

- ・面会の際には些細な変化や様子についても説明と報告を行い、細やかな様子については家族との連絡ノートを作成し、日々の様子を記録して家族にも読んで、コメントを記入していただいた。
- ・眠りスキャン、自動体位交換マットを使用してその方の心拍、呼吸の観察を行ったことで、身体負担の少ない体位交換の実施につながっている。

- 目 標 3 「知識・技術の向上と根拠のある介護の実践を目指す」
- 報 告 3
- ・外部研修として、老協大会、中国大会に参加した。内部の勉強会では、多職種連携会議で眠りスキャンの勉強会、職員会ではアンガーマネジメントの勉強会、高齢者虐待、身体拘束防止の勉強会を開催。介護部門では、ユニ・チャームの協力を得て出張オムツ勉強会を行ってもらった。
  - ・眠りスキャンの導入により利用者の心拍、睡眠時間、離床時間を視覚化することで状態の把握ができた。

- 目 標 4 「感染症対策の研鑽」
- 報 告 4
- ・7年度の上半期は、職員のみでの感染、12月には利用者へのコロナ感染があり、16日間での終息に結びつけた。職員のインフルエンザの発症が下半期にあった。

## <ゆうキッチン部門>

### <調理部門>

- 目 標 1 「入居者の意欲向上、食欲増進を目指す」
- 報 告 1
- ・毎月季節を感じていただけるよう、旬の食材を取り入れたお楽しみ弁当を提供した。また行事食ではカードを作成して華やかな膳を提供することで利用者喜んでいただくことができた。

- 目 標 2 「入居者個々の食事形態の理解を深める」
- 報 告 2
- ・食事の様子の観察、また食事介助に関わることで利用者にあった食事形態の変更等を多職種とスムーズに相談することができた。
  - ・キッチン会議でホールでの気づきとして、個々の状態を伝えることで調理員同士が共通認識をもてた。

- 目 標 3 「安心安全な食事提供」
- 報 告 3
- ・食中毒や感染症の勉強会を行って、意識向上に努めた。市内の他施設ノロウイルスによる集団食中毒が発生した際に、全員が徹底できるよう予防法を再度確認し、安心安全な食事提供ができた。
  - ・反省点として、異物混入等の事故、ヒヤリハットが数件あった。盛付け時の目視。配膳ミスなど確認不足が大半だった。厨房内での衛生面整理整頓を心がけ、緊張感を持って安心安全な食事提供に努めたい。

- 目 標 4 「緊急非常時、感染症発生時の迅速な対応」
- 報 告 4
- ・非常食や水を備蓄し、9月の防災の日に非常食を提供することができた。

- ・1月の東部地震発生時には、落ち着いて安全確認ができ非常食の必要性をあらためて感じた。
- ・感染症の疑いの際には、早い段階で使い捨て容器に切り替え、感染拡大を防ぐことができた。
- ・感染対応の備品については、必要最低限の物を整理することができたので、無駄のない購入方法が定まった。

## ＜栄養部門＞

- 目 標 1 「入居者への無理なく安全な食事提供を目指す」
- 報 告 1
- ・食事の様子や介助を通して入居者を知り、無理のない食事の提供に努めた。特に栄養補助食品の導入については補助食品の形状や種類、摂取のタイミング等、多職種と相談しながら利用者の無理のないように提供することができた。食事内容の変更については栄養側から提案することがなかなかできなかった。
- 目 標 2 「入居者に合った栄養ケア計画書の作成に努める」
- 報 告 2
- ・入居者、家族の意思を尊重し、嘱託医とも連携して経口摂取維持のための継続したサポートが行えた。
- 目 標 3 「療養食加算の取得」
- 報 告 3
- ・療養食の対象となる方に対しては、嘱託医と相談して加算取得のために迅速に対応することができた。しかし、療養食対応の方で入院や状態が悪くなって算定ができなくなったり、逝去されたりして加算がとれなくなった場合もあった。
- 目 標 4 「新 LIFE のフィードバックの活用」
- 報 告 4
- ・LIFE フィードバックを担当者会議等で活用するようになった。フィードバックを使って説明することで、家族に入居者の状態をより分かりやすく説明することができ、ケアの内容に納得してもらえるようになった。

## ＜グループホームさわらび＞

- 目 標 1 「家庭に近い環境の中で、精神的に落ち着いた生活を提供する」
- 報 告 1
- ・季節感のある生活の提供に努め、外出する機会や食や行事なども取り入れ変化のある生活を提供することができた。
  - ・提供する時間に利用者を当てはめるのではなく、利用者の流れに時間を変化させていく柔軟なスタイルで取り組み、利用者のストレスが残らないように努めることができた。
- 目 標 2 「利用者が適切な医療を受けられるよう、かかりつけ医との連携を図る」
- 報 告 2
- ・事業所からかかりつけ医に体調の変化をその都度、情報提供をし指示を仰ぐことが出来た。また緊急時の出来事（転倒、裂傷など）についても、迅速に情報提供に努めるようにしたが夜間の対応には、緊急性

の判断がつきにくく対応が後手に回ることもあった。

・リスク管理については、意識に不十分なところがあった（誤嚥時の対応など）。その為、オンラインでの動画配信を見ながら少しでも慌てず対応が出来るように知識、意識を高めるように努めた。

・年度をとおして院内感染ゼロを目指し、達成することができた。

(その他) ・定期的に、各身元引受人に利用者の生活の様子を配信したり、電話・面会時にその様子を伝えることで安心感を持ってもらい信頼関係を築くことができた。

## 〈デイサービスセンターゆうイング〉

目 標 1 「地域密着型通所介護事業所として、地域に選ばれるデイサービスを目指す」

報 告 1 ・自宅とデイサービスの往復だけが外出にならぬよう、デイサービスにおいても外出の機会（四季を感じることでできるドライブ、買い物支援など）を多く持つことにより利用者の意欲、生活の中での楽しみを見出すように努めることが出来た。

・各居宅介護支援事業所（ケアマネ事業所）へアンケート調査を行い、ケアマネから見る「利用者に紹介したいデイサービスとは？」について検討することが出来た。

目 標 2 「在宅生活、地域との関わりを継続していける機能回復訓練を実施する」

報 告 2 ・機能回復訓練を積極的に取り入れることができた。その結果、機能改善を自覚し歩行や体の動きなどが楽にできるようになったなどの声も聴けるようになった。

・日々デイサービスの介助にも、自宅生活を想定し機能訓練的要素を取り入れることで機能低下防止に努め、効果を出すことができた。

(その他) ・市内全ての居宅介護支援事業所等にアンケート調査、パンフレット及び空き情報を実施した。しかし結果として、利用者の延べ人数は月により、ばらつきがあるものの全体をとおして伸び悩みがある。いろいろな理由が考えられるが、当デイサービスとして今後出来ることは広報活動の活発化、また他デイサービスとの差別化、さらには新たな発想の中での運営が必要と感じる。

## 〈居宅介護支援センターさわらび〉

目 標 1 「タイムリーにサービス提供を行い、利用者・家族に安心感が持てる支援をする」

報 告 1 ・ニーズに対しサービス（通所など）に繋げる事が出来なかった時は、見学などを促し少しでも不安や疑問を取り去り、安心して次の

ステップに繋げる事が出来た。

- ・利用者の状態の変化などに対し迅速な訪問やサービス調整などができない事もあった。今後、対応に困ったケースがあれば一人で抱え込まずに事業所内で相談をする事が必要であると感じた。

目 標 2 「SDGs の観点を持ち、業務の効率化と経費削減に取り組む」

報 告 2

- ・効率の良い訪問に心がけ燃料費の節約に努める事が出来た。
- ・寒波の際の訪問として、車中暖房だけに頼らず各自で工夫して対策をとるようにした。今後夏季対策も同様にエアコンだけに頼るのではなく、できる対策を工夫していきたい。
- ・ペーパーレス化については、用紙の印刷削減に努めてきた。今後は用紙の質を落としコストを抑えることも検討していきたい。

## 〈サンチャイルド長久さわらび園〉

目 標 1 「子どもたちの一日一日を大切に育つ力に愛情を持って見守り、保護者が安心して預けられる保育園を目指す」

報 告 1

- 子どもの人格を尊重し、質の高い保育を提供する。
  - ・保育や生活の中に歌や音があふれる保育園を目指し、音楽担当の職員で、年間の歌を決めてクラスで歌うようにした。年長児のマーチング演奏、1歳児からのリトミックなどでは、様々な楽器にふれたり、音楽に合わせて身体を動かしたりする中で、音楽の力を付けるとともに、情操教育にもつなげていった。
  - ・子どもたちが主体的に遊びや生活を楽しむことができる「主体的保育」に取り組んでいった。子どもたちが自ら遊びを楽しみ、考えたり、試したり、友だちと協力したりする中で育つ力を就学につなげていけるよう努めた。
  - ・ゆうイング訪問が7月より再開し、子どもたちの笑顔と元気をお届けすることができ、高齢者の方との温かいふれあいに子どもたちも喜びを感じていた。ゆうイングに続いてサンシルバー訪問も始まり、2歳児から5歳児まで幅広い年齢で訪問することができた。
  - ・親子クッキング、世界の料理、日本の郷土料理、絵本給食など子どもたちが食に関心を持って、楽しく食べることができるように取り組んだ。
  - ・職員における自己評価を実施して日々の保育内容を振り返るとともに、人権擁護のためのセルフチェックを活用し、不適切保育防止のためのチェックを行い、保育の見直しを図った。
  - ・保育士の資質向上のため、様々な研修に積極的に参加しているが、令和7年度は、7月に中国地区保育研究大会（広島）、11月保育実践セミナー（岡山）と県外の研修にも参加することができた。
- 保育園と保護者が両輪となり共に育てる「共育」を推進する

- ・デジタル化が急速に進む中、昨年度に続き、保護者会の行事に抱き合わせて、保護者のメディア研修を実施した。メディアと上手に付き合いながら、保育園では実際に「見て、触れて、感じる」実体験を大切に、保育を行った。
- ・5月より、保育総合支援ツールのパピーナが導入され、欠席連絡やメール、アンケート、登降園履歴などアプリを通して保護者と園とのスムーズな情報提供が可能になった。

○地域に開かれた保育園を目指す

- ・小学校との連携・接続の中で、昨年度に続き大田市幼児教育施設の公開保育を本園で実施し、小学校との相互理解や連携につなげていくことができた。また、「大田市架け橋カリキュラム」作成に当たり、同じ長久校区の3園と小学校で、校区の架け橋カリキュラム作成に2月より取り組み、令和8年度の5月に大田市に提出することになっている。

## 〈長久ゆうゆう学童クラブ〉

- 目 標 1 「保護者の就労等で育成支援を必要とする子どもたちが放課後のびのびと活動でき、『安心・安全』に過ごせる居場所を提供する」
- 報 告 1
- ・学習面に関しては、宿題を自主的に取り組ませるということで、スタッフ全員で分担し、児童の人数は減少したが、集中して取り組めるようにしている。
  - ・自然体験活動「みーもサマースクール」へ参加（18名）した。
  - ・各種活動の報告、写真（入所時等）の掲示及びお便りを発行し、保護者への理解を図った。
- 目 標 2 「小学生期の人間形成にとって大切な主体的にたくましく生きる力を育成する。」
- 報 告 2
- ・集団遊びに関して、異学年が仲良くできるルールを話し合っ活動をしていた。
  - ・一日の流れを自覚できるように努めた。（着替え5分、おやつ10分、宿題30分）
  - ・基本的な生活習慣を身につけさせる為、学童クラブでの過ごし方をパターン化している。